# きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第56話

水野　スウ

## 『小学校』を観て語る会

4月の紅茶の時間で、ドキュメンタリー映画『小学校～それは小さな社会』を観て語る会をしました。と言っても、観るのは各自映画館で。上映期間中にそれぞれがこの映画を観て、後日集まって感想を持ち寄ろうという会です。

映画の舞台になっているのは、東京都世田谷区のある公立小学校。コロナ下の2021年4月から2022年3月までの1年間、子どもたちの学校生活に長期密着取材して700時間の映像の中から制作された99分のドキュメンタリーです。

この映画は、まず海外で封切られて評判をよんだ後、日本での上映がはじまりました。また、あるエピソードに絞って編集された短編が、アカデミー賞短編ドキュメンタリー部門にノミネートされ、さらに国内の話題を呼びました。日本でも映画館に人がたくさん入っているようで、感動した！と絶賛する感想をあちこちで見聞きします。そんな評判を聞き、私も映画館へ足を運んだのでした。

桜の季節から夏、秋、冬、そしてまた次の春へ。1年間の美しい季節の移ろいとともに、カメラは実に細かく、子どもたちの表情やつぶやき、先生たちの言葉も態度も表情もとらえていて、よくぞこれだけの映像が公立小学校で撮影できたものだと感心します。学校を探すのも交渉するのもどんなに大変だったことでしょう（インタビューで知ったところによると、5年かけて30校も交渉にまわったそうです）。撮影したものを映画として公開することを許可した先生や保護者の方たちもすごいな。コロナ下で子どもたちがどんなふうに過ごさなければいけなかったかニュースで聞いてはいたものの、それを目の当たりにして切なくもなりました。

けれど見終わった時、感動した！という大絶賛の前評判とはまた違った感じ方が、自分の中にむくむくと。これは観た人と感想を話し合いたくなる映画かも、ということで、わが家で語る会をすることにしたのでした。金沢での上映中に映画を見れなかった人向けに、アカデミー賞にノミネートさ

れた23分の映像"Instruments of a Beating Hear"』のYouTubeのリンクもお知らせして。(*1)

## あたりまえの学校？

紅茶での語る会には11人が集まりました。そのうちの3人、お元気な90代お二人と70代お一人は、その日がテーマありの紅茶と知らずに見えた人たちで。90代のお一人は偶然にも元小学校の先生。加えて、語る会のために参加した人たちの中にも小学校で先生していた人が何人か。

この語る会は、映画を見て感じたままを自由にだしあう、言いっぱなし、聞きっぱなしのトーク会です。映画をこれから見ようと思ってる人には、ネタバレおおいにありで、ごめんなさい。ここからはその日の語る会で出てきた言葉と、この映画を撮った山崎エマ監督のインタビューとを織り交ぜながらシェアしたいと思います。

・この春、小学校を卒業した息子と一緒に短編の方を家で見はじめたんだけど、息子にとっては当たり前すぎるらしくて、途中で見るのやめて部屋から出てってしまった。

・映画館には学校の先生たちがけっこう観に来ていたみたい。現役の先生たちにとっては、ある あるだらけのごくふつうの風景。どうしてこれをわざわざ映画にしたんだろう、という声が聞こえてきてた。

この映像が今の日本の公立小学校の代表とはもちろん思わないけれど、映画をみた現役の先生や、この春に小学校を出たばかりの子が、違和感なくこれが当たり前の風景というのなら、この『小学校』はかなり日本の今の小学校の現実に近い姿なのかもしれません。その一方でこんなふうに話す人も。

・生徒たちが教室を掃除したり、給食の配膳当番をしている場面、それに運動会や音楽会といった学校行事。「特活（トッカツ）」と呼ばれるこういう時間のあることが、外国ではすごく驚かれているらしい。

監督は、イギリス人の父、日本人の母のもとに生まれ、小学校の6年間を大阪の公立小学校で、中学高校をインターナショナルスクールで過ごした後、アメリカの大学へ進学し、卒業後はニューヨークで映像制作のお仕事をしてきた方です。

アメリカで働く中で、「すっごいがんばりますよね」「責任感があって、時間通りに来て、チームワークがすごい」と何度も驚かれたりほめられたりしたのだとか。自分にとっては普通に振る舞っていることが、どうしてそんなふうに言われるんだろう。もしかしてここで評価されている自分の強みは、日本の公立小学校で過ごした6年間で学んだ“規律と責任”にあるのではないか——。そんな考えから、日本ではなんの変哲もないと思われている公立の小学校に、あえて焦点をあてた映画を撮ろうと思ったそうです。

## 日本式教育“TOKKATSU”

映画には、小学1年生の子どもたちが教室を掃除する場面や給食を配る場面がたくさん出てきます。日本では当たり前に感じられるこの光景が、海外の上映会ではどこでも「自分の国と全然違う」と驚きをもって受けとめられたそうです。

日本以外では、掃除や配膳はそれを職業として担う人がします。だけど日本の小学校では、掃除も配膳も、集団の中で役割を担い責任を果たし、自分たちのことは自分たちでする、という生活習慣を身につけるための教育の一環、と位置づけられています。運動会や音楽会の本番にむけて練習を重ねることもそう。この映画は、生徒たちが勉強をしているところではなく、まさにこの特別活動（特活（トッカツ）・"TOKKATSU"）に焦点を当てているのです。

公式サイトでは映画のストーリーがこんなふうに紹介されています。(*2)

桜が満開の4月。新年度は入学式から始まる。授業が始まり、1年生は挙手の仕方や廊下の歩

き方、掃除や給食当番など、集団生活の一員としての規律と秩序について初めて学ぶ。そんな1年生の手助けをするのは6年生だ。小さくてまだ何もわからない1年生も、わずか6年の間に自分が何者であるかという自覚を持ち、6年生にふさわしい行動を取るようになる。
主人公は学校そのもの。カメラは、1年生と6年生に焦点を絞り、春夏秋冬、彼らの学校生活を追う。
コロナ禍において学校行事実施の有無に悩み、安全と犠牲をめぐる議論を重ねる教師、社会生活におけるマナーを学んでいく1年生、経験を重ね次章への準備を始める6年生……。3学期になり、2年生に進む1年生は、新1年生のために音楽演奏をすることになる。彼らは社会の一員として生きていくために、ものごとをやり遂げる責任感や、そこで得られる達成感を感じて学び、また“誰かのために何かをする喜び”も体験するのだ。

日本の教育は槍玉にあげられることが多いけど、他国にはないこんないいところがあったのか——日本の小学校にあたりまえにあって、外国の小学校にはないものが改めて見直された。他国や日本でこの映画が評判を呼んでいることの一つに、このTOKKATSUのとりくみがあるのでしょう。
「集団生活の一員」「規律と秩序」「やり遂げる責任感」「誰かのために何かをする喜び」……一つひとつは美しい言葉に聞こえるけど、その言葉たちがこれだけ勢ぞろいするとなんだかちょっと息苦しさも、私は感じてしまう。語る会の中ではこんな感想がありました。

・今の小学校って、こんなにも管理されてるの？

・整然と並ぶ子ども、お行儀いい子ども。そんな場面がいっぱい撮られていたけど、子どもたちの主体性、自主性はどこにあるんだろうって思いながら見ていた。

・廊下をクネクネ歩いてる子に「普通に歩きなさい」って注意してる先生の言葉かけもあったね。

・「普通」からはみ出す子、はじかれる子、適応できない子には居場所がなさそう。

・学校に入るまでは個性を大事に、と言われてきて、でも小学校入ったとたんに強調性を強く求められる。助けて、とか言いにくい人間に育っちゃいそうな気がした。

・映画の最初のシーンが、入学前から家で給食を配る練習するとこだったのにびっくりした。子どもが失敗しないようにしないように、って親も気をつかってるのかなあ。

映画では特活の一つとして、運動会や音楽会の本番にむけて子どもたちが練習を重ね、がんばる場面もたくさん出てきます。運動会では、音楽にあわせてみんなで一斉に決まった順番で縄跳びをする6年生の出し物。音楽会では、次の春に入学してくる新1年生を迎えるために今の1年生が取り組む演奏会。
前もってみんなで練習をして、できない場合は自分の家でも練習して本番を迎える、それもまた日本独特の教育だったことに、山崎さんはインターナショナルスクールに入ってから気づきました。そこではスポーツ大会があっても当日走って終わり。監督にとっては、みんなでがんばって力を合わせて乗り越える、といった場面がなくて物足りなく感じたそうです。

## 演奏会にむけて

語る会の中でも多くの人が触れていたのが、演奏会に向けてシンバル担当になった1年生の女の子をめぐるシーン。アカデミー賞にノミネートされた短編はまさにこの場面を中心に編集されているので、監督にとってとても重要なシーンなのでしょう。YouTubeを見返しながらこの場面を再現してみます。

＊＊＊

音楽指導の先生が一年生たちに話します。「新しい一年生の入学をお祝いしよう。いえ〜い。みなさんのアイディアをかたちにする。『喜びの歌』を演奏してお祝いする。一年生、よろこびそうだよね」

子どもたちはそれぞれ自分が受け持ちたい楽器に志願してオーディションを受けることに。この短編の主人公で、長編ドキュメンタリーでも中心人物の一人であるあやめちゃんは、はりきって大太鼓に手をあげましたが、オーディションで失敗して落ちてしまう。受かった友だちに拍手を送るものの、悲しくて涙がこみあげてくる。数日後のオーディションで、今度はシンバルに再挑戦。みごと合格して「やった〜〜！」と全身で感情を表現するあやめちゃん。同じクラスには、落ちて泣いている子もいれば、応援していた子が落ちて泣く子も。カメラは実に細かくいろんな子どもたちの表情や言葉をとらえています。

楽器練習の前に、先生が子どもたちに向かって、「最後までやりきる力。一年生の役にたつ喜びを知ってほしいなと思います」と話します。

いざ練習が始まると、あやめちゃんはシンバルを打てることが嬉しくてたまらない様子。ほかのパートの演奏中、少しはしゃいでいる。それを目にしてか、先生が言う。

「待っている間、自分だったらどう演奏するかな、考えている人、上手になります。練習にたくさん来ている人はすごく上手になってると思います。練習している間に心がそろってきて、音がそろうようになってきてると思います。逆にいうと練習に来ない人がその心をそろえるのをこわしています、だいなしです」（「だいなし」という日本語の英語字幕は "What a shame"）。

ある日の全体練習で、あやめちゃんはシンバルを打つタイミングがわからなくなって、まちがえてしまいます。先生はみなの演奏を止めるとあやめちゃんのほうに厳しい顔を向けて言いました。

「そこ（叩くところ）あったっけ？（シンバルは）あなた一人しかいないんですよ、その責任が、あなたにはあります。決まったところで叩いてください」

あやめちゃんは小声で「がくふ……わすれた」

先生「いま楽譜ないとできないよって人いますか、手あげてごらん」

子どもたち、しーん。

先生「なんでみんな楽譜なくてもできるんですか？」

子どもたちが口々に「れんしゅうしてきたから」

先生はあやめちゃんに向かって、なおも厳しい口調でたたみかけます。

「みんな一年生のために一生懸命やっている。それをあなたはやっているんですか？　オーディションに受かったらそれでおしまいなの？　それがゴールなの？」

あやめちゃん、はげしく首を横に振りながら泣いています。

先生「違うよね、泣いたら上手になるの？」

ぽろぽろ涙をこぼしがら泣き続けるあやめちゃん。

「学校にいる間だったら先生教えてあげます、でもここがわからないと聞きに来ないし、家でも覚えるくらい練習しなかったらだめだよ。どうしますか？これから。代わってもらいますか？」

あやめちゃんはさらに強く首を振って否定して、泣きながら小さな声で

「いえで……がんばって……れんしゅうする……」

「先生、その言葉信じるよ、いいね」と言って先生はみんなの練習を再開したけれど、あやめちゃんは洋服にボタボタと涙をこぼしながら、バチを握ったまま動くことができませんでした。

## わたしたちは　しんぞうのいちぶ

その後の体育館練習、みんなが整列する中、担任の先生と離れたところでそれを見ているあやめちゃんは不安そうに「まちがえて、またおこられるかもしれない……」。（こんなにちいさな声をどうやってマイクはとらえたんだろう、と驚くほどの消え入りそうな声）

はじめはなかなか演奏に加われなかったけど、担任の先生やクラスメイトに励まされながらなんとかみんなの演奏に参加し、なんとかシンバルをうまく

打てた！　音楽の先生もほめてくれた！　演奏がおわった瞬間、うれしさがあやめちゃんの身体ではじけて、担任の先生のもとに小走りで走っていき、大好きな先生の腰に、後ろから勢いよく抱きつく。見ている私もこの場面、胸がキュッとしました。

その後、あやめちゃんはお家や学校で必死に練習したのでしょう。一年生の入学を祝う会の演奏では、あやめちゃんの自信に満ちた、堂々たるシンバルの叩き方に、私も拍手を贈りたいきもちになった。

だけど、本番が始まる前にあやめちゃんと同級生の子が交わしていた会話――"Instruments of a Beating Heart" という短編のタイトルの元になった彼女たちの言葉が、私の胸にざらっとした違和感として残っています。

「ねぇ、わたしたちってなんなんだろうね？　しんぞうのいちぶ？」とたずねるあやめちゃん。それを聞いて近くの女の子が「わたしたちはしんぞうのかけらで、みんながそろったらこんなかたちになる」と言って手でハートの形をつくります。「ひとりがこんなふうにずれたら、もうしんぞうはできない」と片手をずらすその子を見ながら、あやめちゃんは大人びた口調で言いました。「わたしたちはかこくながっきだよ」

## 「できる」ことがすべて？

あやめちゃんを巡る一連のシーンについて、語る会でも感想がたくさん出ました。

・子どもたちの健気さがすごくいとしかった。がんばる子たちの姿にも胸が熱くなる。そういう場面に感動はしたけど、もやもや、疑問がいっぱい出てきた。

・音楽の先生がシンバルの役をする一年生を追い詰めてNOって言わせなくする場面、痛すぎた。

・1年生に向かって責任を求める、ってどうなんだろう。

・シンバルが打てなくて先生から叱られて泣いてる子を、「このままおいとくわけにいかないし」とそばに行って慰める、「大丈夫？　僕もよく間違える。練習してるけど」と声かけしていた子、やさしいなあ。こういう場面が撮られていて少しほっとした。

映画の中で、あやめちゃんは担任の先生から何度も、早く早く、急いで急いで、とやさしく声かけされていました。もしかしたら、あやめちゃんはもともとゆっくりタイプの子なのかもしれません。それがわかっていて、あえての厳しい指導だったのかな、とも思います。

そう思う一方で、私には音楽の先生の「受かったらそれでおしまいなの？　ゴールなの？　泣いたら上手になるの？」の言葉が痛すぎて胸に刺さったままです。口調こそていねいだったものの、先生が望む答えしか言わせないようにもっていく言い方、他の子どもたちの見ている前であそこまで一年生を追い詰めるのか、と胸が張り裂けそうでした。

どんなに子どもの尊厳を傷つけようと、それでその子が奮起して努力してできるようになって結果がでたら、その指導は正しかったことになるんだろうか。その子が心に負ったかもしれない傷はそれで帳消しになるんだろうか。ほかの子に対しても脅しになってしまわないだろうか。

・がんばって練習してできるようになった成功例はでてきたけど、できなかった子のことは描かれてなかった。

・Do的なこと、できたこと、ばかりほめてるのが気になったな。努力しても努力してもできない子が、実際にはいるはずと思うんだけど。

そうだよね。たまたま、あやめちゃんは先生の厳しい指導を乗り越えて「できる」ようになったから映画で取り上げられたけど、映像になっていない中では、うまくできなかった子もいるし、どんなにがんばってもできない子だっているでしょう。

努力してできるようになることは素晴らしい、という価値が確かにあるにしても、できる／できないの結果だけで、子どもが自分の存在価値を決めてしまうようになったら、それはなんだか違う、という気がしてなりませんでした。

## 山崎監督の思い

映画を見た後、山崎エマ監督はどんな思いでこの映画を撮ったのだろう、ということが知りたくて、インタビュー動画を見てみました。(*3)

監督はインタビューの中で、外国にはない日本の教育のポイントとして、特定の生活習慣を教育の一環にしていること、行事ごとに力を入れて、運動会や音楽会も練習して達成感を得るのを大事にしていること、教育の入り口がまず集団にあって、次に個人がくること、の3つをあげています。特に3つ目についてはこんなふうに語っています。

——欧米と比べた時、欧米は教育の入り口が「個人」。あなたは何なの、誰なの、個性はなんなの、隣の人より何ができるの。個人を作ってから、優先順位としては二番目に協力とか周りの人とうまくやっていくことを教える。日本は真逆。まず集団から、集団の中の責任とか役割とか居場所とか貢献を教えて、優先順位の二番目として個性をつくっていく。真逆の強さと弱さ。

映画ではあえてナレーションをいれず、フラットに描くことを意識していたようだったけど、インタビューを聞くと、批判されることが多い日本の教育にもこんなにいいところがある、と伝えたくてこの映画をつくったという監督の思いが伝わってきました。それは、過酷な現場で奮闘している先生たちにとって、どんなにか励まされることだったろう。自分に子どもが生まれたら日本の公立小学校に入れたい、とも監督は語っています。

実際、監督は映画の中でも、先生たちが苦しみながら迷いながら日々過ごしている様子をたくさん捉えていました。

・先生たち、することやしなきゃならないこと、ありすぎ。忙しすぎる。

・誰もいない教室で机を整える先生。掃除する先生。先生たちもトッカツしてるみたい。

・先生たちの一生懸命さ、自分の時間や家庭を犠牲にしてまで。朝早くから学校に来てかっこむ朝ごはん、もっとちゃんとしたごはん食べて〜って思わず言いたくなった。

・子どもの育ちが先生の通知簿みたい。子どもたちだけでなく、先生もまたしっかりと管理されている。

・先生たちも同じシステムの中に組み込まれて、同じように評価うけてるんだと感じた。

映画の中で「毎日が平均台に立ってバランスをとっているような感じ」とポツリと語った先生の言葉、印象的でした。公式サイトの感想ページには、「この映画によって自分がしていることがようやく認められた」とメッセージを寄せる先生の声もたくさん。そういう先生たちの思いを受けとめ、これだけの大きな反響になってもいるのでしょう。それもまた、先生がどんなに大変な日々を生きているか、ということの裏返しのようにも思えました

## The making of a Japanese

監督の思いは、映画のタイトルやコピーにもあらわれています。この映画の英語版の副題は「The making of a Jpanase」。日本を訪れた観光客が一様に驚く、ゴミの落ちていない街、時間通りにやってくる電車。それを当たり前にしている日本人はこの学校教育によってつくられている、という意味が込められているようです。それと呼応するように映画のチラシに使われているのが「6歳児は世界のどこでも同じようだけれど、12歳になる頃には、日本の

子どもは“日本人”になっている」というコピーです。

・予告編見てチラシ見て、おもしろそう、と観に行った。「日本人は小学校の６年間で日本人になる」とか、英語版のタイトルが「The making of a Japanese 日本人のつくりかた」ってなってたから、てっきり日本の小学校を揶揄的に描くのかと思ってた。けど、そうじゃなかった。

この英語のタイトルとコピーを読んだとき、また別の角度から教育現場を描いたあるドキュメンタリー映画を思い出しました。斉加尚代さんが監督した『教育と愛国』です。

この映画では、はじめの方に第二次世界大戦中にアメリカで制作された「汝の敵、日本を知れ」という国策映画の一場面が登場します。軍部が日本全体を掌握できた理由が教育制度にある、と考えたアメリカが、子どもながらに規律を守り責任を果たそうとする、まるで軍隊の兵士のように統率のとれた子どもたちの教育場面を、驚きと恐れをもってアメリカ国民に伝えていたのです。その映像と「The making of a Japanese」のフレーズが私の中でどうしても重なって思えたのでした。

・『小学校』のはじめの方で、大学の先生が講演している場面。その中で「教育は諸刃の刃」という言葉があったから、日本の教育に対する批判的な視点も映画の中にあるんだろうな、と思いながら見はじめたんだけど、そんな場面はなかったなあ。

ここで、大学の先生というのは、國學院大学人間開発部初等教育学科教授、杉田洋氏のことです。映画の中では、こんなふうに話されていました。

——日本の教育は協調性を学ばせるという点で海外では評価が高いと言われるが、ルールからはみ出す子が排除される危険性もある。教育は諸刃の刃ということを肝に命じてほしい。

紅茶で語る会の後日、映画を見た娘と“二人で語る会”をしたとき、娘がこんな感想を言っていました「どうして日本には“役に立たなければ自分の価値がない”と苦しんでる人がこんなにたくさんいるんだろう、ってずっと不思議だったけど、その答えがこの映画に描かれていると思った」。

娘自身も一時期、「役に立たない自分はいちゃいけない」と思って苦しんでいた時代がありました。私は彼女に対して「役に立つ人間になれ」なんて育てたつもりまったくなかったし、彼女自身にも、どうして自分はこんなふうに思うんだろう？と理由がわからなかった。娘は、自分の通った小学校はいいところだったし先生も好きだったと言います。だけどこの映画を見たことで、先生個人がどんな人であるかを超えて、「公立小学校」というもの自体がこの社会の中で機能として担っているものがあり、そこで身につけた価値観が知らず知らずのうちに自分の体に染み込んでいたのではないか、と考えたそうです。

協調性、責任を持つこと、誰かの役に立つこと、最後までやりきること——確かにどれもひととしての大切な徳目でしょう。だけど、一人ひとり尊厳をもった個の存在である、という事実よりも先に、集団での役割ばかりが求められすぎる状況、それが『小学校』の映画の中で善として強調されていることに、私はなんだかとてもあやういものを感じています。

## 何のための教育？

そういう日本とは違う教育をしているところってどこだろう、と考えた時、軍隊を捨てた中南米の国、コスタリカの小学校について、ジャーナリストの伊藤千尋さんが、こんなふうに書いていたことを思い出しました。(*4)

小学校に入学した子どもたちは最初に「だれもが愛される権利を持っている。この国に生まれた以上、あなたは社会から愛される」と教えられます。基本的人権を小学１年生でもわかる「愛される」という言葉で習うのです。

伊藤さんは、子どもたちがこのように教わる理由として、「憲法の中でも人権という最も大切な一点を、最初にしっかりと頭に入れるのです。政府や社会は一人ひとりの人権を守るべき存在であることも、子どもの心に根づきます」と書いています。

山崎監督が、教育の入り口が個人が先か、集団がが先かが違う、と話していたけど、まず集団の中の責任や役割を学ぶことから入っていく日本とはまるっきり逆なのが、コスタリカの教育なのです。

伊藤さんがコスタリカの公教育省（日本の文科省のようなところ）を訪れた時には「他人の権利を認めることが平和につながる。自分と同じく他人の人生を人間として尊重することから民主主義が生まれる。コスタリカは平和の文化を創ろうとしています」という話を聞いたそうです。

また、若者の投票率が80％以上もある国として有名なスウェーデンの教員向け教材（*5）には「スウェーデンの学校には民主主義を教えるミッションがある」と書かれています。そのミッションにそって、さまざまな方法で民主主義の価値や知識や実践方法を教える主権者教育をおこなっているのです。

日本もコスタリカもスウェーデンも、どんな社会や文化をつくりたいかというヴィジョンが先にあり、そこから逆算して子どもたちに何を教えるのか決めている、という点では共通しています。ただ、つくりたい国のかたちが違うから、教育のかたちも違う。

娘が参加した、また別の語る会では「小学校は社会に出るためのツールなんだから（厳しいのは当たり前）」という意見が出たそうだけど、それはあくまでも日本の中での小学校の位置づけに過ぎない、ということです。

コスタリカやスウェーデンでは、民主主義を実践するための場所として、学校が機能しています。その一方、私には今の日本の教育目標が、規律を守り、集団の中で役割を果たし、国に貢献する人材を育てるという方向に見えます。そして、それはまさにこの映画で監督が描きたいと思った点と見事に合致しているように思えるのです。

「いま、小学校を知ることは、未来の日本を考えること」というのは映画のチラシで使われているコピーです。教育というものが、その国の人をつくり、その人が社会をつくる、というのは本当にその通り。だからこそ、教育というものがどれだけ広範囲に影響を及ぼす力を持っているかを肝に銘じておかないと。そこがまさに諸刃の刃と言われるゆえんだと思うのです。

## もやもやの出どころ

紅茶での語る会で、「この映画に“諸刃の刃”という言葉が出てきた割には、批判的な場面が出てこなかった」と感想を話した人がいて、私もその時は確かにそうだな、と思いました。監督自身も、日本の教育には課題もあるけれどいいところもたくさんある、と語る対談の中で、課題について詳しくは言及しなかった。

だけど語る会をしたあと、この作品についてマガジンで書こうと思い、書きはじめ、さらに映画を見た娘とも二人で語る会をするなかで、監督の意図かどうかはわからないけれど、ちゃんと刃は描かれているじゃないか、と思えてきました。

たとえば、1年生の子どもたちがクラスメイトの下駄箱をチェックして、靴を揃えて入れているか◯や△や×印を書こうとする場面（どうやらそういう係があるよう）、私から見たらちゃんときれいに揃っているように見える靴にも「これは△だな」と話す場面、グラウンドを眺めながらマスクをしない子たちを観察して「よくないね〜」「よくないね〜」と子ども同士で言い合う場面。

一つひとつはほんのささいな場面。だけどそれが積み重なるとどうだろう。「ルールからはみ出す子が排除される危険性もある」という杉田氏の言葉とオーバーラップする気がしたのでした。

集団からはみ出さないように、迷惑かけないように、集団の役に立つ存在でいないといけない。そう課されることが日常の中で、だんだん追い詰められたようなきもちになる子どもや先生たちが出てきても、ちっともおかしくはない気がします。娘は「も

しかして日本の幸福度ランキングが低いこととか若者の自殺率が高いことってこのあたりとつながってるのかも」と言っていたけど、私も同感です。

いま私にとって、この映画はまさに日本の教育が内包する諸刃の刃をリアルにとらえた作品のように思えます。見ている間そこかしこに、本当にこれでいいんだろうか、という違和感の種がありました。

・何かあったとき一斉にいうことをきく、あの時代にすぐ逆戻りするよ、これなら。

これは、語る会の最後の最後、参加していた人から出てきた一言。この映画を観た後、私の中で真っ先に出てきたのは、これはいったい誰がよろこぶ映画だろう、という素朴な疑問でした。先生？　子どもたち？親たち？　それとも——？　ここで描かれている教育システムは、上から見て管理しやすい、従順な子どもたちを育てる方法で、権力者にとって都合がよい、うれしい教育、というのはいいすぎだろうか。語る会の日が近づくにつれてそんなきもちがふくらんできていたので、「あの時代にすぐ逆戻り」とはっきり言った彼女にドキッとし、あ、同じこと考えてた人がいる、とおおいにうなづいたのでした。

同じ映画を見ても、子どもたちの健気さに感動した、あたたかいきもちになった、という人もたくさんいます。私の中でも、子どもの姿に胸がいっぱいになる瞬間が、確かにあった。だけど、“新しい戦前”と表現される今の時代。集団の中で役割を果たそうとがんばる子どもたちの姿に感動するきもち、その一人ひとりの素朴な感情が、何か大きなものに利用されてしまうことはないのだろうか。見ながらなんかもやもやしたり、疑問がわいてきたりした出どころはおそらくそこだった、と今は思います。

外国からほめられることに弱い日本だからなおさら、賞賛や国内での評判に流されず、日本の教育システムの諸刃の刃に対して慎重でありたい、と思っているところです。

それにしても、こんなにも観た人の感想が分かれ、観た後に人と話したくなるというのは、この映画が日本の小学校についても教育についてもいっぱい考えさせてくれる、そもそもその意味でとても意義深い作品なのではないかと思います。

何も知らずに紅茶にきて語る会に参加しちゃった（笑）90代の元先生。「自分は何もわからなかった教師で、ピアノもひけなかった。いい父兄（今は保護者っていうけどかつては父兄と呼ばれていた）に育てられたのよ」と、実に楽しそうにご自分が小学校にいたころの教師経験を話してくださった。映画の感想から脱線しての昔話がどころどころまじるのも、また紅茶らしい一場面でした。

（2025.5.31）

*1　動画"Instruments of a Beating Heart"
https://youtu.be/DRW0auOiqm4?si=pq-sL7LKtN_ZPw1r

*2　映画『小学校～それはちいさな社会～』公式サイト
https://shogakko-film.com

*3　動画「【日本の小学校の映画が世界で大反響】ドキュメンタリー監督・山崎エマ／公立小学校が『日本をつくる』／“個性重視”教育の北欧が日本の小学校を再評価したワケ【CROSS DIG 1on1】」
https://www.youtube.com/watch?v=-1lZkfxGfRw

*4　ジャーナリスト伊藤千尋の公式サイト「コスタリカ［3］小学生が最初に教わる愛される権利」
https://www.itochihiro.com/articles/c3.html

*5　スウェーデン市民社会庁（MUSF）（著）両角達平・リンデル佐藤良子・轡田いずみ（訳）
『政治について話そう！スウェーデンの学校における主権者教育の方法と考え方』アルバカ